

中国怪奇小説集

酉陽雜俎（唐）

岡本綺堂

青空文庫

第三の男は語る。

「唐代は詩文ともに最も隆昌をきわめ、支那においては空前絶後ともいうべき時代であり、ますから、小説伝奇その他の文学に関する有名の著作も甚だ多く、なにを紹介してよろしいか頗る選択に苦しむのでありますが、その中でわたくしは先ず『西陽雜俎』のお話をすることに致します。これも『搜神記』と同様に、早くわが国に渡来して居りますので、その翻案がわが文学の上にもしばしばあらわれて居ります。

この作者は唐の段成式であります。彼は臨淄の人で、字を柯古といい、父の文昌が校書郎を勤めていた関係で、若いときから奇編秘籍を多く読破して、博覧のきこえの高い人物でありました。官は太常外卿に至りまして、その著作は『西陽雜俎』（正編二十卷、続集十卷）をもって知られて居ります」

古塚の怪異

唐の判官を勤めていた李邕という人は、高陵に庄園を持っていたが、その庄

に寄留する一人の客がこういうことを懺悔ざんげした。

「わたくしはこの庄に足を留めてから二、三年になります、実はひそかに盗賊を働いていたのでございます」

李邈もおどろいた。

「いや、飛んでもない男だ。今も相変らずそんな悪事を働いているのか」

「もう唯今は決して致しません。それだから正直に申し上げたのでございます。御承知の通り、大抵の盗賊は墓あらしをやります。わたくしもその墓荒しを思い立って、大勢の徒党を連れて、さきごろこの近所の古塚をあばきに出かけました。塚はこの庄から十里（六丁一里）ほどの西に在って、非常に高く、大きく築かれているのを見ると、よほど由緒のあるものに相違ありません。松林をはいって二百歩ほども進んでゆくと、その塚の前に出ました。生い茂った草のなかに大きい碑が倒れていましたが、その碑はもう磨滅まめつして、なんと彫つてあるのか判りませんでした。ともかくも五、六十丈ほど深く掘つて行くと、一つの石門がありまして、その周囲まわりは鉄汁をもつて嚴重に鑄固めてありました」

「それをどうして開いた」

「人間の糞ふん汁じゆうを熱く沸かして、幾日も根こんよく沃そそぎかけていると、自然に鉄が溶けるの

です。そうして、ようようのことで、その石門をあけると驚きました。内からは雨のように箭やを射出して来て、たちまち五、六人を射倒されたので、みな恐れて引返そうとしましたが、わたくしは肯ききませんでした。ほかに機からくり関があるわけではないから、あらん限りの箭を射尽くさせてしまえば大丈夫だというので、こちらからも負けずに石を投げ込みました。内と外とで箭と石との戦いが暫く続いているうちに果たして敵の矢種やだねは尽きてしまいました。

それから松明たいまつをつけて進み入ると、行く手に又もや第二の門があつて、それは訳なく明きました。門の内には木で作った人が何十人も控えていて、それが一度に剣をふるったから堪たまりません。さきに立っていた五、六人はここで又斬り倒されました。こちらでも棒をもつてむやみに叩き立てて、その剣をみな撃ち落した上で、あたりを見まわすと、四方の壁にも衛兵の像が描いてあつて、南の壁の前に大きい漆塗うるしりの棺が鉄の鎖くさりにかかつていました。棺の下には金銀や宝玉のたぐいが山のように積んである。さあ見付けたぞとは言つたが、前に懲こりているので、迂闊うかつに近寄る者もなく、たがいに顔を見あわせていると、俄かに棺の両角から颯さっさつ々という風が吹き出して、沙すなを激しく吹きつけて来ました。あつと言ううちに、風も沙もますます激しくなつて、眼口めくちを明けていられないどころか、

地に積む沙が膝を埋めるほどに深くなつて来たので、みな恐れて我れ勝ちに逃げ出しましたが、逃げおくれた一人は又もや沙のなかへ生け埋めにされました。

外へ逃げ出して見かえると、門は自然に閉じて、再びはいることは出来なくなっています。たといはいることが出来ても、とても二度と行く気にはなれないので、誰も彼も早々に引き揚げて来ました。その以来、わたくしどもは誓つて墓荒しをしないことに決めました。あの時のことを考えると、今でも怖ろしくなりません」

この話はこれで終りであるが、そのほかにも墓を発あばいて種々の不思議に出逢つた話はたくさんに言い伝えられている。

近い頃、幾人の盜賊が蜀しよくの玄徳げんとくの墓をあばきにはいると、内には二人の男が燈火あかりの下で碁を打つていて、ほかに侍衛の軍人が十余人も武器を持って控えていたので、盜賊どももおどろいて謝まり閉口すると、碁にむかつていた一人が見かえつて、おまえ達は酒をのむかと言ひ、めいめいに一杯の酒を飲ませた上に、玉の腰帶ひとすじずつを呉れたので、盜賊どもは喜んで出て来ると、かれらの口は漆を含んだように閉じられてしまった。帶と思つたのは巨おおきい蛇であつた。

王申の禍

唐の貞元ていげん年間のことである。望苑ぼうえん駅えきの西に王申おうしんという百姓が住んでいた。

彼は奇特きせきの男で、路ばたにたくさんの榆にれの木を栽うえて、日蔭になるような林を作り、そこに幾棟の茅屋かややを設けて、夏の日に往来する人びとを休ませて水をのませた。役人が通行すれば、別に茶をすすめた。こうしているうちに、ある日ひとりの若い女が来て水を求めた。女は碧あおい肌着あおに白い着物をきていた。

「わたくしはここから十余里の南に住んでいた者ですが、夫に死に別れて子供はなし、これから馬嵬ばかい駅えきにいる親類を頼って行こうと思つていたのでございます」と、女は話した。その物言ものごといもはきはきしていて、その挙とりなし止とも愛あらしかつた。

王申も氣の毒に思つて、水を与えるばかりでなく、内へ呼び入れて、飯をも食わせてやつて、きようはもう晩おそいから泊とまつてゆけと勧めると、女はよろこんで泊とめて貰もらうことになつた。その明くる日、ゆうべのお札お札に何かの御用を致いたさしようというので、王の妻が試こしに着物を縫ぬわせると、針の運びの早いのは勿論、その手ぎわが実に人間わざとは思おもわれないほどに精巧せきわを極きめていたので、王申も驚おどかさされた。殊とに王の妻は一層その女を愛す

るようになって、しまいには冗談のようにこんな事を言い出した。

「聞けばお前さんは近しい親類もないということだが、いつそ私の家のお嫁さんになっておくれでないかね」

王の家には、ことし十三になる息子がある。——十三の悴に嫁を迎えるのは珍しくない。——両親も内々相当の娘をこころがけていたのであった。それを聞いて、女は笑って答えた。

「仰しやる通り、わたくしは頼りの少ない身の上でございますから、もしお嫁さんにして下されば、この上もない仕合わせでございます」

相談はすぐに決まって、王の夫婦も喜んだ。善は急げというので、その日のうちに新しい嫁入り衣裳を買い調べて、その女を息子の嫁にしてしまったのである。その日は暮れても暑かったが、この頃ここらには盗賊が徘徊するので、戸締りを厳重にして寝ると、夜なかなかって王の妻は不思議の夢をみた。息子が散らし髪で母の枕元にあらわれて、泣いて訴えるのである。

「わたしはもう食い殺されてしまいます」

妻はおどろいて眼をさまして、夫の王をよび起した。

「今こんな忌な夢をみたから、息子の部屋へ行つて様子をみて来ましようか」

「よせ、よせ」と、王は寝ぼけ声で叱つた。「新夫婦の寢床をのぞきに行く奴があるものか。おまえはいい嫁を貰つたので、嬉しまぎれにそんな途方もない夢をみたのだ」

叱られて、妻もそのままに眠つたが、やがて又もや同じ夢をみたので、もう我慢が出来なくなつた。再び夫をよび起して、無理に息子の寢間へ連れて行つて、外から試みに声をかけたが、内にはなんの返事も無い。戸を叩いてもやはり黙つているので、王も不安を感じて来て、戸を明けようとすると堅くとぎざされている。思い切つて、戸をこじ明けてはいつてみると、部屋のうちには怖ろしい物の影が見えた。

それはおそらく鬼とか夜叉とかいいうのであろう。からだは藍のような色をして、その眼は円く晃つていた。その齒は鑿のように見えた。その異形の怪物はおどろく夫婦を衝き退けて、風のように表のかたへ立ち去つてしまったので、かれらはいよいよおびやかされた。して、息子はと見ると、唯わずかに頭の骨と髪の毛とを残しているのみで、その形はなかつた。

画中の人

これも貞元の末年のことである。開州かいしゅうの軍將に冉從長せんじゅうちようという人があつて、財を輕んじて士を好むというふうがあるので、儒生じゆせいや道士のたぐいは多くその門に集まつて来たが、そのなかに※采ねいさいという画家もまじつていた。

その※采があるとき竹林ちくりんの七賢人しちけんじんの図をかいて、それが甚だ巧みに出来たので、観る者いづれも感嘆していると、一坐の客のうちに郭萱かくけんといい柳城りゅうじようという二人の秀才があつて、たがいに平生から軋きしり合つていたが、柳城はその図をひとめ見て、あざ笑いなから主人の冉從長に言つた。

「この画は人間の体勢に巧みであるが、人間の意趣いしゆというものが本当に現われていない。わたしはこの画に対してなんらの筆を着けずに、一層の精彩を加えてお見せ申そうと思つた、いかがでしょう」

冉はすこし驚いた。

「あなたにどんな芸があるか知らないが、なんらの筆を加えずに、この画の精彩を添えるというようなことが出来ますか」

「それは出来ます」と、柳は平気で答えた。「わたしはこの画のなかへはいつて直すので

す」

それを聞いて、郭萱も笑い出した。

「子供だましのような事を言つてはいけない。なんにも筆を入れなくて、あの画を直すことが出来る筈がないではないか」

「いや、それが出来るのだ」

「出来るものか」

「そんなら賭けをするか」と、柳は言った。

「むむ、五千の錢ぜにを賭ける」

郭は錢を賭けることになつた。主人の冉も賭けた。すると、柳は壁にかけてある画の前に立つたかと思うと、忽ちに身を跳わたらせて消えてしまったので、一坐の者はみな驚いて、ここかそこかと探し廻つたが、どこにもその姿はみえなかつた。やがて、画の中から柳の声が聞えた。

「おい、郭君。まだおれの言うことを信じないのか」

一坐は又おどろいて眺めていると、柳は再び姿をあらわして、画の上から降りて来た。そうして、七賢人のうちの阮籍げんせきを指さした。

「みんなが待ち遠しいだろうと思いましたが、唯あれだけを繕つくろって置きました」

人びとは眼を定めてよく視ると、なるほど阮籍だけは以前の凶と違って、その口は仰いでうそぶくがごとくに見えたので、いずれもいよいよ驚嘆した。冉も郭も彼が道士の道に精通していることを初めて覚さとった。

こんな噂が世間に拡まつては、身の禍いになると思つたらしい。それから五、六日の後に、柳はそこを立ち去つて行くえを晦くらました。

北斗七星の秘密

唐の玄宗皇帝げんそうの代に、一行いちぎようという高僧があつて、深く皇帝の信任を得ていた。

一行は幼いとき甚だ貧窮であつて、隣家の王おうという老婆から常に救われていた。彼は立身の後もその恩を忘れず、なにか王婆に酬むくいたいと思つていて、あるとき王婆の息子が人殺しの罪に問われることになつたので、母は一行のところへ駈け付けて、泣いて我が子の救いを求めたが、彼は一応ことわつた。

「わたしは決して昔の恩を忘れはしない。もし金や帛きぬが欲しいというのなら、どんなこ

とでも肯きいてあげる。しかし明君が世を治きめている今の時代に、人殺しの罪を赦ゆるすなどということは出来るものでない。たとい私から哀訴したところで、上かみでお取りあげにならないに決きまっているから、こればかりは私の力にも及およばないと諦あきらめてもらいたい」

それを聞いて、王婆は手を戟ほしにして罵ののつた。

「なにかの役にも立たとうかと思えばこそ、久しくお前の世話をしてやったのだ。まさかの時にそんな挨拶を聞くくらいなら、お前なんぞに用はないのだ」

彼女は怒おこつて立ち去さろうとするのを、一行は追おいかけて、頻しきりによんどころない事情を説明して聞きかせたが、王婆は見返りもせずに出て行いってしまった。

「どうも困こつたな」

一行は思案の末に何事かを考え付おぼいた。都の渾こん天寺てんじは今や工事中で、役夫えきごが数百人もあつまっている。その一室を空から明あきにさせて、まん中に大瓶かめを据たえた。それから又、多年召仕しよっている僕しもべ二人を呼よんで、大きい布ぬの囊ぶくろを授たまげてささやいた。

「町の角に、住む人もない荒園あれにわがある。おまえ達はそこへ忍しのび込んで、午うまの刻こく（午前十一時―午後一時）から夕方まで待つている。そうすると七つの物がいって来る。それを残のこらずこの囊ふくろに入れて来い。数は七つだぞ。一つ不足しても勘弁かんべんしないからそう思え」

僕どもは指図通りにして待つっていると、果たして西の刻（午後五時―七時）を過ぎる頃に、荒園の草をふみわけて豕の群れがはいってきたので、一々に囊をかぶせて捕えると、その数はあたかも七頭であった。持つて帰ると、一行は大いに喜んで、その豕をか瓶のなかに封じ込めて、木の蓋をして、上に大きい梵字を書いた。それが何のまじないであるかは、誰にもわからなかった。

あくる朝になると、宮中から急使が来て、一行は皇帝の前に召出された。

「不思議のことがある」と、玄宗は言った。「太史（史官）の奏上によると、昨夜は北斗七星が光りを隠したということである。それは何の祥であろう。師にその禍いを攘う術があるか」

「北斗が見えぬとは容易ならぬことでござります」と、一行は言った。「御用心なさらねばなりません。匹夫匹婦もその所を得ざれば、夏に霜を降らすこともあり、大いに早することでもござります。釈門の教えとしては、いっさいの善慈心をもって、いっさいの魔を降すのほかはござりませぬ」

彼は天下に大赦の令をくだすことを勧めて、皇帝もそれにしたがった。その晩に、太史がまた奏上した。

「北斗星が今夜は一つ現われました」

それから毎晩一つずつの星が殖えて、七日の後には七星が今までの通りに光り輝いた。大赦の令によつて王婆の息子が救われたのは言うまでもない。

駅舎の一夜

孟不疑もうふぎという拳人きよじん（進士しんしの試験に応ずる資格のある者）があつた。昭義しょうぎの地方に旅寝して、ある夜ある駅に泊まつて、まさに足をすすごうとしているところへ、淄青しせいの張ちやうという役人が数十人の供を連れて、おなじ旅舎へ乗り込んで来た。相手が高官とみて、孟は挨拶に出たが、張は酒を飲んでいて顧りみないので、孟はその倨傲きよごうを憤りながら、自分は西の部屋へ退いた。

張は酔つた勢いで、しきりに威張り散らしていた。大きい声で駅の役人を呼び付けて、焼餅しやうべいを持つて来いと呶鳴つた。どうも横暴な奴だと、孟はいよいよ不快を感じながら、ひそかにその様子をうかがっていると、暫くして注文の焼餅を運んで来たので、孟はまた覗いてみると、その焼餅を盛つた盤ばんにしたがつて、一つの黒い物が入り込んで来た。それ

は猪ししのようなものであるらしく、燈火あかりの下へ来てその影は消えた。張は勿論、ほかの者もそれに気が注つかなかつたらしいが、孟は俄かに恐怖をおぼえた。

「あれは何だろう」

孤駅こえきのゆうべにこの怪を見て、孟はどうしても眠ることが出来なかつたが、張は酔つて高軒いびきで寝てしまった。供の者は遠い部屋に退いて、張の寝間は彼ひとりであつた。その夜も三更さんこう（午後十一時—午前一時）に及ぶころおいに、孟もさすがに疲れてうとうと眠つたかと思うと、唯ならぬ物音にたちまち驚き醒めた。一人の黒い衣きものを着た男が張と取つ組み合つてゐるのである。やがて組んだままで東の部屋へ転げ込んで、たがいに撲なぐり合う拳こぶしの音が杵きねのようにきこえた。孟は息を殺してその成り行きをうかがつてゐると、暫くして張は散らし髪かみの両肌ぬぎで出て来て、そのまま自分の寢床にあがつて、さも疲れたように再び高軒で寝てしまった。

五更ごこう（午前三時—五時）に至つて、張はまた起きた。僕しもべを呼んで燈火をつけさせ、髪をくしけずり、衣服をととのえて、改めて同宿の孟に挨拶した。

「昨夜は酔つていたので、あなたのことをちつとも知らず、甚だ失礼をいたしました」
それから食事を言い付けて、孟と一緒に仲よく箸をとつた。そのあいだに、彼は小声で

言つた。

「いや、まだほかにもお詫びを致すことがある。昨夜は甚だお恥かしいところを御覧ごらんに入れました。どうぞ幾重にも御内分にねがいます」

相手があやまるように頼むので、孟はその上に押して聞くのを遠慮して、ただ、はいはいとならずにしていると、張は自分も早く出発する筈であるが、あなたもお構いなくお先へお発ち下さいと言つた。別れるときに、張は靴の中から金一錠ていを探り出して孟に贈つて、ゆうべのことは必ず他言して下さるなど念を押した。

何がなんだか判らないが、孟は張に別れて早々にここを出発した。まだ明け切らない路を急いで、およそ五、六里も行ったかと思うと、人殺しの賊を捕えるといつて、役人どもが立ち騒いでいるのを見た。その子細しさいを聞きただすと、溜青の評事の役を勤める張という人が殺されたというのである。孟はおどろいて更に詳しく聞き合わせると、賊に殺されたと言つているけれども、張が實際の死にざまは頗る奇怪なものであつた。

孟がひと足さきに出たあとで、張の供の者どもは、出発の用意を整えて、主人と共に駅舎を出た。あかつきはまだ暗い。途中で気がついてみると、馬上の主人はいつか行くえ不明になつて、馬ばかり残つているのである。さあ大騒ぎになつて、再び駅舎へ引つ返して

詮議すると、西の部屋に白骨が見いだされた。肉もない、血も流れていない。ただそのそばに残っていた靴の一足によつて、それが張の遺骨であることを知り得たに過ぎなかった。こうしてみると、それが普通の賊の仕業しわざでないことは判り切っていた。駅の役人も役目の表として賊を捕えるなどと騒ぎ立てているものの、孟にむかつて窃ひそかにこんなことを洩らした。

「この駅の宿舎には昔から凶わるいことがしばしばあるのですが、その妖怪の正体は今にわかりません」

小人

唐の太和たいわの末年である。松しょうじ滋じ県の南にひとりの土があつて、親戚の別荘を借りて住んでいた。初めてそこへ着いた晩に、彼は士人の常として、夜の二更（午後九時—十一時）に及ぶ頃まで燈火ともしびのもとに書を読んでみると、たちまち一人の小さい人間が門から進み入つて来た。

人間といつても、かれは極めて小さく、身の丈たけわずかに半寸に過ぎないのである。それ

でも葛くずきものの衣を着て、杖を持って、悠然とはいり込んで来て、大きい蠅はえの鳴くような声で言った。

「きよう来たばかりで、ここには主人もなく、あなた一人でお寂しいであろうな」

こんな不思議な人間が眼の前にあらわれて来ても、その士は頗る胆力があるので、素知らぬ顔をして書物を読みつづけていると、かの人間は機嫌を損じた。

「お前はなんだ。主人と客の礼儀をわきまえないのか」

士はやはり相手にならないので、かれは机の上に登って来て、士の読んでいる書物を覗いたりして、しきりに何か悪口を言った。それでも士は冷然と構えているので、かれも燥じれてきたとみえて、だんだんに乱暴をはじめて、そこにある硯すずりを書物の上に引っくり返した。士もさすがにうるさくなったので、太い筆をとってなぐり付けると、彼は地に墜おちてふた声三声叫んだかと思うと、たちまちにその姿は消えた。

暫くして、さらに四、五人の女があらわれた。老いたのもあれば、若いのもあり、皆そのたけは一寸ぐらいであったが、柄にも似合わない大きい声をふり立てて、士に迫って来た。

「あなたが独りで勉強しているのを見て、殿さまが若殿をよこして、学問の奥義おうぎを講釈さ

せて上げようと思つたのです。それが判らないで、あなたは乱暴なことをして、若殿にお怪我をさせるとは何のことです。今にそのお咎めを蒙るから、覚えておいでなさい」

言うかと思う間もなく、大勢おおぜいの小さい人間が蟻ありのように群集してきて、机に登り、床にのぼつて、滅茶苦茶に彼をなぐつた。土もなんだか夢のような心持になつて、かれらを追い攘はらうすべもなく、手足をなぐられるやら、噛まれるやら、さんざんの目に逢あわされた。「さあ、早く行け。さもないと貴様の眼をつぶすぞ」と、四、五人は彼の面かおにのぼつて来たので、土はいよいよ閉口した。

もうこうなれば、かれらの命令に従うのほかはないので、土はかれらに導かれて門を出ると、堂の東に節使衛門せつしがもんのような小さい門がみえた。

「この化け物め。なんで人間にむかつて無礼を働くのだ」と、土は勇気を回復して叫んだが、やはり多勢たぜいにはかなわない。又もやかれらに噛まれて撲られて、土は再びぼんやりしているうちに、いつか其の小さい門の内へ追いこまれてしまった。

見れば、正面に壮大な宮殿のようなものがあつて、殿上には衣冠の人が坐っている。階下には侍衛らしい者が、数千人も控えている。いずれも一寸あまりの小さい人間ばかりである。衣冠の人は土を叱つた。

「おれは貴様が独りでいるのを憐れんで、話し相手に子供を出してやると、飛んでもない怪我をさせた。重々じゅうじゅうふらち不埒ふらちな奴だ。その罪を糺ただして胴斬りにするから覚悟しろ」

指図にしたがつて、数十人が刃やいばをぬき連れてむかつて来たので、土は大いに懼おそれた。彼は低頭して自分の罪を謝すと、相手の顔色も少しくやわらいだ。

「ほんとうに後悔したのならば、今度だけは特別をもつて赦ゆるしてやる。以後つつしめ」
土もほつとして送りだされると、いつか元の門外に立っていた。時はすでに五更で、部屋に戻ると、机の上には読書のともしびがまだ消え残っていた。

あくる日、かの怪しい奴らの来たらしい跡をさがしてみると、東の古い階段の下に、粟あ粒わつぶほどの小さい穴があつて、その穴から守宮やもりが出這入りしているのを発見した。土はすぐに幾人の人夫を雇つて、その穴をほり返すと、深さ数丈のところにかくさんの守宮が棲んでいて、その大きいものは色赤くして長さ一尺に達していた。それが恐らくかれらの王であるらしい。あたりの土は盛り上がつて、さながら宮殿のように見えた。

「こいつらの仕業だな」

土はことごとくかれらを焚やき殺した。その以来、別になんの怪しみもなかった。

怪物の口

臨湍寺りんたんじの僧智通ちつうは常に法華經ほけきょうをたずさえていた。彼は人跡稀じんせきまれなる寒林に小院をかまえて、一心に經文誦誦どくじゆを怠らなかつた。

ある年、夜半にその院をめぐつて、彼の名を呼ぶ者があつた。

「智通、智通」

内ではなんの返事もしないと、外では夜のあけるまで呼びつづけていた。こういうことが三晩もやまないばかりか、その声が院内までひびき渡るので、智通も堪えられなくなつて答えた。

「どうも騒々しいな。用があるなら遠慮なしにはいつてくれ」

やがてはいつて来た物がある。身のたけ六尺ばかりで、黒い衣きものをきて、青い面かおをしていた。かれは大きい目をみはつて、大きい息をついている。要するに、一種の怪物である。しかもかれは僧にむかつてまず尋常に合掌した。

「おまえは寒いか」と、智通は訊いた。「寒ければ、この火にあたれ」

怪物は無言で火にあたっていた。智通はそのままにして、法華經を読みつづけていると、

夜も五更に至る頃、怪物は火に酔ったとみえて、大きい目を閉じ、大きい口をあいて、炉ろに倚よりかかつて高いびきで寝入ってしまった。智通はそれを観て、香をすくう匙さじをとって、炉の火と灰を怪物の口へ浚さらい込むと、かれは驚き叫んで飛び起きて、門の外へ駈け出したが、物につまづき倒れるような音がきこえて、それぎり鎮まった。

夜があけてから、智通が表へ出てみると、かれがゆうべ倒れたらしい所に一片の木の皮が落ちていた。寺のうしろは山であるので、彼はその山へ登ってゆくと、数里（六丁一里）の奥に大きな青桐の木があつた。梢こすえはすでに枯れかかつて、その根のくぼみに新しく欠けたらしい所があるので、試みにかの木の皮をあててみると、あたかも貼り付けたように合つた。又その根の半分枯れたところに洞うつろがあつて、深さ六、七寸、それが怪物の口である。ゆうべの灰と火がまだ消えもせずに残つていた。

智通はその木を焚やいてしまった。

一つの杏

長白山ちやうはくざんの西に夫人の墓というのががある。なんびとの墓であるか判わからない。

魏ぎの孝昭帝こうしょうていのときに、令ひろして汎ひろく天下の才俊を徴めすということになった。清河の崔さい羅什いらしゅうという青年はまだ弱冠じやくかんながらもかねて才名があつたので、これも徴されてゆく途中、日が暮れてこの墓のほとりを過ぎると、たちまちに朱門しゆもん粉壁ふんぺきの楼台が眼のまえに現われた。一人の侍女らしい女が出て来て、お嬢さまがあなたにお目にかかりたいと言いう。崔は馬を下りて付いてゆくと、二重の門を通りぬけたところに、また一人の女が控くわえていて、彼を案内した。

「何分にも旅姿をしているので、この上に奥深く通るのは余りに失礼でございます」と、崔は一応辞退した。

「お嬢さまは侍じちゆう中の呉質ごしつというかたの娘御むすめごで、平陵へいりょうの劉府君りゆうふくくんの奥様ですが、府君はさきにおなくなりになったので、唯今さびしく暮らしておいでになります。決して御遠慮のないように」と、女はしいて崔を誘い入れた。

誘われて通ると、あるじの女は部屋の戸口に立つて迎えた。更にふたりの侍女が燭しよくをとつていた。崔はもちろん歓待されて、かの女と膝をまじえて語ると、女はすこぶる才藻さいそうに富んでいて、風雅の談の尽くるを知らずという有様である。こんな所にこんな人が住んでいる筈はない、おそらく唯の人間ではあるまいと、崔は内心疑いながらも、その話がお

もしろいのを心を惹かされて、さらに漢魏時代の歴史談に移ると、女の言うことは一々史実に符合しているので、崔はいよいよ驚かされた。

「あなたの御主人が劉氏と仰しやることは先刻うかがいましたが、失礼ながらお名前はなんと申されました」と、崔は訊いた。

「わたくしの夫は、劉孔才こうさいの次男で、名は瑤よう、字は仲璋ちゅうしょうと申しました」と、女は答えた。「さきごろ罪があつて遠方へ流されまして、それぎり戻つて参りません」

それから又しばらく話した後に、崔は暇いとまを告げて出ると、あるじの女は慇懃いんぎんに送つて来た。

「これから十年の後にまたお目にかかります」

崔は形見として、玳瑁たいまいのかんざしを女に贈つた。女は玉の指輪を男に贈つた。門を出て、ふたたび馬にのつてゆくこと数十歩、見かえればかの楼台は跡なく消えて、そこには大きい塚が横たわつているのであつた。こんなことになるかも知れないと、うすうす予期していたのではあるが、崔は今さら心持がよくないので、後に僧をたのんで供養をして貰つて、かの指輪を布施物ふせもつにささげた。

その後に変つたこともなく、崔は郡の役人として評判がよかつた。天統てんとうの末年に、彼

は官命によつて、河の堤を築くことになったが、その工事中、幕下ぼつかのものに昔話をして、彼は涙をながした。

「ことしは約束の十年目に相当する。どうしたらよからうか」

聴く者も答うるところを知らなかった。工事がとどこおりなく終つて、ある日、崔は自分の園中あんずで杏の実を食っている時、俄かに思い出したように言った。

「奥さん。もし私を嘘つきだと思わないならば、この杏を食わせないで下さい」
彼は一つの杏を食い尽くさないうちに、たちまち倒れて死んだ。

劍術

韋行規いこうぎという人の話である。

韋が若いとき京きょう西せいに遊んで、日の暮れる頃にある宿場に着いた。それから更にゆく手を急いそぐうとすると、駅舎の前にはひとりの老人が桶を作っていた。

「お客人、夜道の旅はおやめなさい。ここらには賊が多うございます」と、彼は韋にむかつて注意した。

「賊などは恐れぬ」と、韋は言った。「わたしも弓矢を取っては覚えがある」

老人に別れを告げて、彼は馬上で夜道を急いでゆくと、もう夜が更けたと思う頃に、草むらの奥から一人があらわれて、馬のあとを尾けて来るらしいので、韋は誰だと思つても返事をしない。さてこそ曲者と、彼は馬上から矢をつがえて切つて放すと、確かに手堪えはありながら、相手は平気で迫つて来るので、更に二の矢を射かけた。続いて三発、四発、いずれも手堪えはありながら、相手はちつとも怯まない。そのうちに、矢種は残らず射尽くしてしまったので、彼も今更おそろしくなつて、馬を早めて逃げ出すと、やがて又、激しい風が吹き起り、雷もすさまじく鳴りはためいて来たので、韋は馬を飛び降りて大樹の下に逃げ込んだ。

見れば、空中には電光が飛び違つて、さながら鞆を撃つ杖のようである。それが次第に舞い下がつて、大樹の上にひらめきかかると、何物かが木の葉のようにばらばらと降つて来た。木の葉ではなく板の札である。それが忽ちに地に積もつて、韋の膝を埋めるほどに高くなつたので、彼はいよいよ驚き恐れた。

「どうぞ助けてください」

彼は弓矢をなげ捨てて、空にむかつて拝すること数十回に及ぶと、電光はようやく遠ざ

かつて、風も雷もまたやんだ。まずほつとして見まわすと、大樹の枝も幹も折れているばかりか、自分の馬も荷物もどこへか消え失せてしまったのである。

こうなると、もう進んでゆく勇氣はないので、早々にもと来た道を引つ返したが、今度は徒^{かち}あるきであるから搦^{はか}どらず、元の宿まで帰り着いた頃には夜が明けて、かの老人は店さきで桶の籠^{たが}をはめていた。まさに尋常の人ではないと見て、韋は丁寧に拝して昨夜の無礼を詫びると、老人は笑いながら言った。

「弓矢を恃^{たの}むのはお止しなさい。弓矢は劍術にかないませんよ」

彼は韋を案内して、宿舎のうしろへ連れてゆくと、そこには荷物を乗せた馬が繋いであった。

「これはあなたの馬ですから、遠慮なしに牽^ひいておいでなさい。唯^{ただ}ちつとばかりあなたを試して見たのです。いや、もう一つお目にかける物がある」

老人はさらに桶の板一枚を出してみせると、ゆうべの矢はことごとくその板の上に立っていた。

都の市中に住む悪少年どもは、かれらの習いとして大抵は髪を切っている。そうして、
 膚には種々の刺青ほりものをしている。諸軍隊の兵卒らもそれに加わって乱暴をはたらき、蛇を
 たずさえて酒家にあつまる者もあれば、羊脾をとって人を撃つ者もあるので、京兆
 (京師の地方長官)をつとめる薛公が上に申し立ててかれらを処分することとなり、
 長に命じて三千人の部下を忍ばせ、見あたり次第に片端から引つ捕えて、ことごとく市
 に於いて杖殺させた。

そのなかに大寧坊に住む張幹なる者は、左の腕に『生不怕京兆尹』右
 の腕に『死不怕閻羅王』と彫っていた。また、王力奴なるものは、五千銭をつい
 やして胸から腹へかけて一面に山水、邸宅、草木、鳥獸のたぐいを精細に彫らせていた。
 かれらも無論に撃ち殺されたのである。その以来、市中で刺青をしている者どもは、み
 な争つてそれを焼き消してしまった。

また、元和の末年に李夷簡という人が蜀の役人を勤めていたとき、蜀の町に住む趙
 高という男は喧嘩を商売のようにしている暴れ者で、それがために幾たびか獄屋に入れ
 られたが、彼は背中一面に毘沙門天の像を彫っているので、獄吏もその尊像を憚つて杖

をあてることが出来ない。それを幸いにして、彼はますますあばれ歩くのである。

「不埒至極の奴だ。毘沙門でもなんでも容赦するな」

李は彼を引つくくらせて役所の前にひき据え、新たに作った筋金入りの杖で、その背中を三十回余も続けうちに撃ち据えさせた。それでも彼は死なないで無事に赦し還された。これですすがに懲りるかと思いのほか、それから十日ほどの後、趙は肌ぬぎになって役所へ吠鳴り込んで来た。

「ごらんなさい。あなた方のおかげで毘沙門天の御尊像が傷だらけになってしまいました。その修繕をしますから、相当の御寄進をねがいます」

李が素直にその寄進に応じたかどうかは、伝わっていない。

朱髮児

嚴げんじゆ綬じゆが治めていた太たいげん原げん市中の出来事である。

町の小しょうに児にらが河に泳いでいると、或る物が中流をながれ下つて来たので、かれらは争いくえつてそれを拾い取ると、それは一つの瓦の瓶かめで、厚い帛きぬをもって幾重いくえにも包んであった。

岸へ持つて来て打ち毀すと、瓶のなかからは身のたけ一尺ばかりの赤児が跳り出したので、小児らはおどろき怪しんで追いまわすと、たちまち足もとに一陣の旋風が吹き起つて、かの赤児は地を距る数尺の空を踏みながら、再び水中へ飛び去ろうとした。

岸に居あわせた船頭がそれを怪物とみて、棹をとって撃ち落すと、赤児はそのまま死んでしまったが、その髪は朱のように赤く、その眼は頭の上に付いていた。

人面瘡

数十年前のことである。江東の或る商人の左の二の腕に不思議の腫物が出来た。その腫物は人の面の通りであるが、別になんの苦痛もなかった。ある時たわむれに、その腫物の口中へ酒をそそぎ入れると、残らずそれを吸い込んで、腫物の面は、酔ったように赤くなつた。食い物をあたえると、大抵の物はみな食つた。あまりに食い過ぎたときには、二の腕の肉が腹のようにふくれた。なんにも食わせない時には、その臂がしびれて働かなかつた。

「試みにあらゆる葉や金石草木のたぐいを食わせてみる」と、ある名医が彼に教えた。

商人はその教えの通りに、あらゆる物を与えると、唯ひとつ貝母ばいぼという草に出逢ったとき、かの腫物は眉をよせ、口を閉じて、それを食おうとしなかった。

「占めた。これが適葉だ」

彼は小さい葦よしの管くだで、腫物の口をこじ明けて、その管から貝母の搾しぼり汁をそそぎ込むと、数日の後に腫物は痂かせて癒った。

油売

都の宣平坊せんぺいぼうになにがしという官人が住んでいた。彼が夜帰って来て横町へはいると、油を売る者に出逢った。

その油売りは大きい帽をかぶって、驢馬ろばに油桶をのせていたが、官人のゆく先に立ったままで路を避けようともしないので、さき立ちの従者がその頭を一つ引っぱたくと、頭はたちまちころりと落ちた。そうして、路ばたにある大邸宅の門内にはいつてしまった。

官人は不思議に思つて、すぐにその跡を付けてゆくと、かれのすがたは門内の大きい槐えんじゆの下に消えた。いよいよ怪しんで、その邸の人びとも知らせた上で、試みにかの槐の下

を五、六尺ほど掘つてみると、その根はもう枯れていて、その下に畳一枚ほどの大きい蝦が蟻まがうずくまっているのを発見した。蝦蟇は銅で作られた太い筆筒ふでづつ二本をかかえ、その筒のなかには樹の汁がいつぱいに流れ込んでいた。又そのそばには大きい白い菌きのこが泡を噴いていて、菌の笠は落ちていたのであった。

これで奇怪なる油売りの正体は判った。

菌は人である。蝦蟇は驢馬である。筆筒は油桶である。この油売りはひと月ほども前から城下の里へ売りに来ていたもので、それを買う人びとも品がよくて価あたいの廉やすいのを内々不思議に思っていたのであるが、さてその正体があらわれると、その油を食用きようじうに供した者はみな煩わづらい付いて、俄かに吐いたり瀉くだしたりした。

九尾狐

むかしの説に、野狐のぎつねの名は紫狐しこといい、夜陰やいんに尾を撃つと、火を発する。怪しい事でしょうとする前には、かならず髑髏どくろをかしらに戴いて北斗星を拝し、その髑髏どくろが墜おちなければ、化けて人となると言い伝えられている。

劉元鼎が蔡州を治めているとき、新破の倉場に狐があばれて困るので、劉は捕吏をつかわして狐を生け捕らせ、毎日それを毬場へ放して、犬に逐わせるのを楽しみとしていた。こうして年を経るうちに、百数頭を捕殺した。

後に一頭の疥のある狐を捕えて、例のごとく五、六頭の犬を放したが、犬はあえて追いつかない。狐も平気で逃げようとしめない。不思議に思つて大将の家の獬廌を連れて来た。監軍もまた自慢の巨犬を牽いて来たが、どの犬も耳を垂れて唯その狐を取り巻いているばかりである。暫くすると、狐は跳つて役所の建物に入り、さらに脱け出して城の牆に登つて、その姿は見えなくなつた。

劉はその以来、狐を捕らせない事にした。道士の術のうちに天狐の法というのがある。天狐は九尾で金色で、日月宮に使役されているのであるという。

妬婦津

伝えて言う、晋の大始年中、劉伯玉の妻段氏は字を光明といい、すこぶる嫉妬ぶかい婦人であつた。

伯玉は常に洛神らくしんの賦ふを愛誦して、妻に語った。

「妻を娶めとるならば、洛神のような女が欲しいものだ」

「あなたは水神を好んで、わたしをお嫌いなさるが、わたしとても神になれないことはありません」

妻は河に投身して死んだ。それから七日目の夜に、彼女は夫の夢にあらわれた。

「あなたは神がお好きだから、わたしも神になりました」

伯玉は眼が醒めて覚さとった。妻は自分を河へ連れ込もうとするのである。彼は注意して、その一生を終るまで水を渡らなかつた。

以来その河を妬婦津とくふしんといい、ここを渡る女はみな衣裳をつくろわず、化粧を剥はがして渡るのである。美服美粧して渡るときは、たちまちに風波が起つた。ただし醜みにくい女は粧飾して渡つても、神が妬ねたまないと見えて無事であつた。そこで、この河を渡るとき、風波の難に逢わない者は醜婦であるということになるので、いかなる醜婦もわざと衣服や化粧を壊して渡るのもおかしい。

齊ことわざの人の諺ことわざに、こんなことがある。

「よい嫁を貰おうと思つたら、妬婦津の渡し場に立っている。渡る女のよいか醜いかは自

然にわかる」

悪少年

元和げんなの初年である。都の東市に李和子りわしという悪少年があつて、その父を努眼どがんと云つた。和子は残忍の性質で、常に狗いぬや猫を搔かつさらつて食い、市中の害をなす事が多かつた。

彼が鷹たかを臂ひじに据えて往来に立っていると、紫の服を着た男二人が声をかけた。

「あなたは李努眼の息子さんで、和子という人ではありませんか」

和子がそうだと答えて会釈えしやくすると、二人はまた言つた。

「少し子細しさいがありますから、人通りのない所で話しましょう」

五、六歩さきの物蔭へ連れ込んで、われわれは冥府の使いであるから一緒に来てくれと言つたが、和子はそれを信じなかつた。

「おまえ達は人間ではないか。なんでおれを欺だますのだ」

「いや、われわれは鬼きである」

ひとりがふところを探つて一枚の諜状を取り出した。印いんの痕もまだあざやかで、李和子

の姓名も分明にしるしてあつた。彼に殺された犬猫四百六十頭の訴えに因つて、その罪を論ずるといふのである。

和子も俄かにおどろき懼れて、臂の鷹をすてて拝礼し、その上にこう言つた。

「わたくしも死を覚悟しました。しかしちつとのあいだ猶予して、わたくしに一杯飲ませてください」

あなた方にも飲ませるからと言つて、無理に勧めてそこらの店屋へ案内したが、二人は鼻を掩うてはならない。さらに杜という相当の料理屋へ連れ込んだが、二人のすがたは他人に見えず、和子が独りで何か話しているので、気でも違つたのではないかと怪しまれた。彼は九碗の酒を注文して、自分が三碗を飲み、余の六碗を西の座に据えて、なんとか助けをもらう方便はあるまいかと頼んだ。

二人は顔を見あわせた。

「われわれも一酔の恩を受けたのであるから、なんとか取り計らうことにしましょう。では、ちよつと行つて来るから待つていて下さい」

出て行つたかと思つと、二人は又すぐに歸つて来た。

「君が四十万の錢をわきまえるならば、三年の命を仮すことにしましょう」

和子は承諾して、あしたの午うまの刻までにその錢を調えることに約束した。二人は酒の代を払った上に、その酒を和子に返した。で、彼は試みに飲んでみると、その味は水のごとくで、齒に沁みるほどに冷たくなっていた。和子は急いで我が家へ帰って、衣類諸道具を売り払って四十万の紙錢しせんを買った。

約束の時刻に酒を供えて、かの紙錢を焚やくと、きのうの二人があらわれてその錢を持って行くのを見た。それから三日の後に、和子は死んだ。

鬼界の三年は、人間の三日であつた。

唐櫃の熊

唐の寧王ねいおうが※ちよの界さかいへ獵かりに出て、林のなかで獲物えいものをさがしていると、草の奥に一つの櫃ひつを発見した。蓋ふたの錠が嚴重に卸おろしてあるのを、家来に命じてこじ明けさせると、櫃の内から一人の少女が出た。その子細をたずねると、彼女は答えた。

「わたくしは姓を莫ばくと申しまして、父はむかし仕官の身でござりました。昨夜劫盜ごうとうに逢あいました、そのうちの二人は僧で、わたくしを拐かどわか引してここへ運んで参ったのでござ

ります」

愁うれいを含んで訴える姿は、又なく美しく見えたので、王は悦よろこんで自分の馬へ一緒に乗せて帰った。そのときあたかも一頭の熊を獲たので、少女の身代りにその熊を櫃に入れて、もとの如くに錠をおろして置いた。

その頃、帝は美女を求めていたので、王はかの少女を献上し、且つその子細を申し立てると、帝はそれを宮中に納いれて才さいじん人の列に加えた。それから三日の後に、京兆の役人が奏上した。

※県の食店へ二人の僧が来て、一昼夜万錢で部屋を借り切りにした。何か法事をおこなうのだといっていたが、ただ一つの櫃かを昇かき込んだだけであつた。その夜ふけに、ばたばたいう音がきこえて、翌あさの日の出る頃まで戸を明けないので、店の主人が怪しんで、戸をあけて窺うと、内から一頭の熊が飛び出して、人を突き倒して走り去った。二人の僧は熊に啖くわれたと見えて、骸骨をあらわして死んでいた。

帝はその奏そうもん聞を得て大いに笑った。すぐに寧王のもとへその事を知らせてやって、君はかの悪僧らをうまく処置してくれたと褒めた。少女は新しい唄を歌うのが上手で、莫ばくき才いじん人てん囀ぜんと言いはやされた。

徐敬業

唐の徐敬業は十余歳にして弾射を好んだ。小弓をもって弾丸を射るのである。父の英公は常に言った。

「この兎の人相は善くない。後には我が一族を亡ぼすものである」

敬業は射術ばかりでなく、馬を走らせても消え行くように早く、旧い騎手も及ばない程であった。英公は獐を好んだので、あるとき敬業を同道して、森のなかへはいつて獣を逐い出させた。彼のすがたが森の奥に隠れた時に、英公は風上から火をかけた。父は我が子の将来をあやぶんで焼き殺そうとしたのである。

敬業は火につつまれて、逃るところのないのを覚るや、乗馬の腹を割いてその中に伏していた。火が過ぎて、定めて焼け死んだと思いのほか、彼は馬の血を浴びて立ち上がったので、父の英公もおどろいた。

敬業は後に兵を挙げて、則天武后を討とうとして敗れた。

死婦の舞

鄭賓ていひん于うの話である。彼が曾かつて河北に客かくとなつているとき、村名主むらなぬしの妻が死んでまだ葬らないのがあつた。日が暮れると、その家の娘子供は、どこかで音楽の声こゑがきこえるように思ったが、その声は次第に近づいて庭さきへ来た。妻の死骸は動き出した。

音楽の声は室内へはいつて、梁はりか棟むなぎのあいだに在るかと思つと、死骸は起たつて舞いはじめた。声はさらに表の方へ出ると、それに導かれたように死骸もあるき出して、ついに門外へ立ち去つた。家内一同はおどろき懼おそれたが、月の暗い夜であるので、追うことも出来なかつた。

夜ふけに名主は外から歸つて来て、その話を聞くと、彼はふとい桑の枝を折り取つた。それから酒をしたたかに飲んで、大きい声で罵りわめきながら、墓場の森の方角へたずねてゆくと、およそ五、六里ちよう（六丁一里）の後、柏の樹の森の上で又もやかの音楽の声こゑがきこえた。

近寄つてみると、樹の下に明るい火が燃えて、そこに妻の死骸が舞っているのである。彼は桑の杖を振りあげて死骸を撃つた。

死骸が倒れると、怪しい^{がく}樂の声もやんだ。彼は死骸を背負って帰った。

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

酉陽雜俎（唐）

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>